

# 網野菊の死生観

——『さくらの花』を中心に——

佐々木 清次

はじめに

昭和四十四年四月の自作年譜（『網野菊全集第三巻』所収・講談社・昭和四十四年五月）によると、網野菊は、日本女子大学校在学中に「二月」という作品を書いて作家デビューした。当時十七歳だった。『さくらの花』というのは、昭和三十五年（網野六十一歳）の時、「群像」五月号に「さくらの花」という題で載せ、翌年「別冊小説新潮」一月号に「白い菊」（『さくらの花』第二部、三十五年八月作）、続いて「挿話」四月号に「野辺おくり」（『さくらの花』第三部）を世に出した。デビューしてから四十四年の月日が経っている。彼女は、大学時の同級生に中条百合子（後の宮本百合子）を持つほか、大正十二年の二十四歳の時に、以前からその作品に親しんでいた志賀直哉を訪問し、その後生涯の師と仰いだ。志賀を訪ねたのは、関東大震災の折、たまたま友人と京都に行ったとき、京都を発つ朝に、一期の思いで、当時粟田口に

住んでいた彼を訪ねたという。瀧井孝作にも初の対面をしている。「震災の年」（昭和十七年作）によると、彼女は、大正十四年頃に、「光子」という原稿を志賀に渡し、彼の尽力によって、翌年「中央公論」に載せられたという。また、芥川龍之介は、「中央公論」（大正十五年）に載った「義経」（のち「九官鳥」）をほめたと言われる。しかし、久米正雄からは「此の人（『網野菊』筆者注）は到底職業作家にはなれない。」と言われたらしい。（『芥川さんへの感謝』・『芥川全集』月報・昭和三十三年二月・筑摩書房）

ところで、網野菊を語る際、忘れてはならないのは、その不運の生涯である。まず、実母との生き別れが、七歳の時である。その後、義母を三度迎える。そして、親戚や父や妹の死に何度も遭遇し、自身の病とも度々闘った。彼女は、こうした身内の不運を事細かに描写した。いわゆる私小説作家といわれるゆえんである。さらに、結婚生活も、三十一歳から三十九歳にかけて体験したものの、その後は一人暮らしの状態であった。昭和二十一年（四十七歳）頃には、孤独感を感じることもあったという。

そんな彼女が書いた『さくらの花』には、妹の死を題材にして、彼女の妹の死に対する考え方が示された作品である。そして、それは実話に基づくものであり、彼女の生涯を通じて培われた死生観が顕著に現れた作品とも言える。

### 第一章 「さくらの花」における死について

まず『さくらの花』にあらわれた病氣や死について列挙すると、次のようになる。(括弧内は、作品中の期日である。)

- ・祖父が胸の病氣で死亡する。
- ・叔父がガンで死ぬ。
- ・弟伸二が戦争で行方不明となる。(戦争中)
- ・妹「ゆう子」の実母が三十七歳にチブスで死亡する。
- ・妹伊佐子が盲腸の手術後、死亡する。(十三年前のこと)
- ・父が肺炎で死亡する。
- ・「ゆう子」の顔色が悪くなる。(この一年前、異常妊娠で手術する。)(九月以降)
- ・ゆう子の胃ガンが進行する。
- ・友人「町子」の夫が病死する。(二月四日)
- ・知人の婦人がガンで亡くなる。(二月十二日)
- ・歌舞伎俳優「K丈」の母が、ガンで死ぬ。(三月)
- ・「よし子」の同業者の婦人が、肺ガンで死亡する。(同月)

・「ゆう子」の本葬が伊豆で執り行われた。(四月十五日)

このように「さくらの花」では、「よし子」を主人公に、妹「ゆう子」の胃ガンを中心として、家族や親戚、それに友人・知人という周囲の人間の病氣や死が数多く描かれている。

では、これらの作品にあらわれた病氣や死が、網野自身もしくは周囲に存在していたのかと言うと、先の年譜からすると、ほぼ内容は一致する。簡単に作者の年譜を辿ると次のようになる。

- ・大正 元年 (十三歳) 腹膜炎や肋膜炎に罹る。
- ・大正 二年 (十四歳) 叔母の家で病臥する。
- ・大正十三年 (二十五歳) 従兄弟の精一が発病する。
- ・大正十四年 (二十六歳) 精一が死去する。
- ・昭和 三年 (二十九歳) 祖父が死去する。
- ・昭和十九年 (四十五歳) 六月、弟の伸男の召集、満州へ行くが、すぐに発病する。その後、終戦後は、消息を絶つ。
- ・昭和二十二年 (四十八歳) 父が肺炎で死去する。
- ・昭和二十三年 (四十九歳) 十二月二十二日、妹恵基子が死去する。
- ・昭和二十六年 (五十二歳) 知人の宮本百合子が死去する。
- ・昭和三十五年 (六十一歳) 四月十一日、妹露木婦久子が死去する。

このように見てくると、作品中の「ゆう子」は、年譜における「露木婦久子」であることがわかる。「ゆう子」は、四月十一日（月）の午前亡くなる。「医師が、『四時……分でした。』と云って、一礼した。」（本本文引用は、講談社文芸文庫本に拠った。以下同じ）とある。そして、妹「伊佐子」の命日も十二月二十二日であり、年譜の「惠基子」の死んだ日と一致する。（ただ、死んだ年は、作品と年譜とは一年のズレが生じている。）その他、父や祖父の死去、弟の消息不明など、ほぼ作品と作者の年譜とが一致している。

ここで具体的に作品の内容を分析することを試みる。まず、よし子のゆう子への関わり方だが、最初は、ゆう子の怒りを買っていた。例えば、一月十日に二人は、手術のことで喧嘩する。明日の手術のことをよし子が、ゆう子に尋ねる場面である。また、同月十二日には、よし子がゆう子の唇をガーゼで濡らせたり、掛け布団を直してやろうとすると、ゆう子から邪険にされる場面がある。その結果、よし子は見舞いに行くことから遠ざかる。これは「ゆう子が会いたくなかったからだ。」とか「ゆう子のそばへ行つて戦々兢兢とした気持ちになるのが苦しかったからだ。」と言つた、よし子の言葉に表明されているように、肉親ゆえに、接近することで、お互いが不満を露にして、ぶつかり合うことが出現してくるためである。それらは皆、恩師（『志賀直哉のこと、筆者

注）がアドバイスしたように、肉親ゆえにわがままが言えることだったのかも知れない。それでも、よし子は、ゆう子との確執に相当、精神的につらい思いをする。そして、その緊張した関係は、臨終の時にも続く。よし子は、ゆう子の死に際しても涙は見せない。「来るべきものが到頭来た」と感じ、「ゆう子の死を悲しむよりも、彼女がよし子の心配した程苦痛にさらされないで死んだことを喜ぶ心の方が強かった。」とある。ここには、よし子のゆう子の死を冷静に見つめる姿勢が窺われる。そして、涙は意外にも、作品で言うと「野辺おくり」の部分で現れる。一つ目が、ゆう子の実家である伊豆地方の「家並、それから、川の流などを見て歩いて居る」時、二つ目が、ゆう子の家の墓の場所から町をへだてた山の林の景色など眺めて居る時である。つまり、病室という定まった場所ではなく、伊豆という、しかも野辺おくりという動的な場で、涙が流されたということが特徴と言える。そして、この場合の涙というものは、生前、二人の間に取り交わされた確執が、一つの濁りとなって、よし子の心の奥底に蓄えられ、美しい景色を見ることで、よし子の心の解放が、涙と共に一挙になされたものと見て良いと考えられよう。

次に、よし子が、ゆう子の見舞いに贈った「花」に注目すると、ここには、よし子のこだわりがあり、それが作品の展開を支えるものになっていることがわかる。一つには、第二部の題名にもなっている「白い菊」であるが、よし子は、入院中のゆう子への贈り物として、「白い菊」を選ぶが、縁起が良くないという理由で、

ゆう子から嫌がられる。そして、ゆう子が死んでから、棺の中へ花を入れる時に、「葬儀屋は、二輪だけ、既につみとつてあつた白菊の花を足もとにすてた。」とあり、よし子は「ガクンと頭をなぐられたようなショックだつた。」という場面があり、ゆう子の亡き後まで、この花を贈つたよし子の心の中は、後悔の念で一杯となる。それに対して、題名ともなつた「さくらの花」は、これが伊豆からゆう子の病室に届けられ、よし子と共に眺める所があるが、「さくらの花を嬉しそうに眺めて居るゆう子の哀れさが、ひとよし子の心にこたえた」とあるように、ゆう子の容体の悪さが、妹への哀れさと共に、さくらの花を見て嬉しそうにしている妹ゆえに、余計に印象深くなる場面として、読者に強く訴えかけてくる表現となつている。つまり、花というものが、命のはかなさや人間の感情のもつれを象徴していると言える。

さらに、ゆう子を他の女性と比較することによつて、ゆう子を効果的に際立たせている。例えば、ゆう子は、病室へ注文の品をどんどん届けさせるが、それを見て、よし子は、思わず義妹の妙子のことを想起する。妙子は、ゆう子が派手好きなのに対して、つつましかで、穏やかに描かれている。また、ある未亡人が、出征の夫が帰らぬ人となつたのに対して、「此の未亡人の一生に比べると、ゆう子は、そんな悲しみを味わわなかつただけ幸福といふべきではないか、とよし子は思つたりした。」とあるように、姉として妹をひいき目に見ずに、常に他の女性と引き比べて、幸福かどうかを考えてみると言つた、公平で冷静な目を持つている。

一方、よし子の、ゆう子に対する関わり方が、生前と死語において、変化が見られる。生前には、「ゆう子はよし子の声を聞く」と、完全に拒否する「始末であるし、よし子の方は「ゆう子に母親代わりに世話したのに、何もそんなに怒られる筋合いはない」と『反撥』した」とあるように、二人の確執の溝は深い。しかし、それが、ゆう子の死後には、彼女に対する見方が変化する。例えば、従業員に慕われていたゆう子（彼女は旅館の女将であつた）の存在に気付いたり、盛大な葬儀や立派な大広間が完成したことを、ゆう子が生きていたら、どんなにか喜んだらうと、よし子が想像する所などは、姉として妹のことを愛し、慈しむ心が描写されていると言つてもよからう。つまり、表面的には、二人は反撥し合いながらも、よし子の心の深い所では、共鳴し合うものが在つたとしても過言ではない。まさに、恩師が言つたように、妹のわがままを、姉として受け止め、大きな愛情で妹を見つめられたよし子というものが感じられる。

ところで、作品では、二人以外にも、多くの人々が二人を助ける役割を担う。まず、ゆう子の夫の従兄弟に当たる妻田の夫人は、二人のけんかを、仲裁する役目をする。あるいは、「ゆう子の死に目に会いたい気はなかつた」よし子に対し、ゆう子は「やす子（＝ゆう子の娘、筆者注）と伊藤さんさえ居てくれれば、ほかの誰も来てくれなくていい。」とまで言つたことに対し、よし子は「ゆう子にとつて何よりの慰めだつたに違いない。」と感謝するのである。こうした周囲の人々の助けに支えられていることも作品

の特徴と言える。

## 第二章 網野菊作品に見る死について

先述したように、網野ほど生涯を通じて、身内の不幸に遭遇したものはいない。特に、実母との生き別れの体験では「実母が家から居なくなつて了つた時の悲しみは到底一生忘れ得ない。」〔若日〕（昭和十七年二月）という強烈なものだつたと言ふ。この七歳の時に流した涙は、網野の心を深く傷つけたことだろう。これが、継母の死に際しては、「悲しみに沈んではいなかった」（同右）とある。従弟の死に対しては、「泣いても泣いても泣き足りなかつた。」〔純一の手紙〕〔改造〕・昭和二年五月）とある。しかし、この時は、恩師の志賀直哉を訪ねた喜びがあつたので「いとこの死の打撃に耐え得た。」〔風呂敷敷〕〔汽車の中で〕所収・昭和十五年七月）とある。その後、二度の自殺未遂と、自殺願望の出現があるが、度重なる不幸から「心身が疲れすぎると、死による悲しみからの解放を思わずに居られない。」〔年の瀬〕〔ニューエージ〕所収・昭和二十五年三月）とあるように、現実の苦しみを味わう網野に対して、死が、永遠に解放されるものとして、彼女に誘いかけた。

このように見ると、愛するものを失い、また自分自身や世の中への絶望を人一倍味わわなければならなかつた網野の生涯が、今さらながら理解される。その中で、涙を流しながら、ある

いは死ぬ一歩手前で、奇跡とも思われる所で一命をとりとめて来た。だから、逆に網野には、容易なことでは涙を流さぬ性格が形成されたのであるうし、生きるということに執着もまた多く持つたのであろう。

だから、『さくらの花』におけるように、妹の病氣や死においても、義妹や未亡人と比較したりする沈着冷静とも言える眼で、主人公が持っていたのも、また、さくらの花を見る妹の命の哀しみやはかなさを主人公が慈しむのも、やはり、これらの長年の、病氣や死による苦しみを経験してきた、網野の人生での蓄積が生んだからだと言つても過言ではなからう。すなわち、「よし子の涙は、他の人々が泣く時には出て来ず、誰も泣いて居ない時に、あふれ出るのであつた。」という、主人公の独特の感受性こそは、涙が枯れ果てるほど、生きる哀しさをを経験した網野自身の、忍耐強く、しかし心の奥底で、深い愛情をたたえた人生の反映だつたと考えたい。

## 第三章 死生観を中心とする評価

筆者は、これまで、網野の死生観について、『さくらの花』を中心に、生きることの哀しさへの慈しみや、涙の出し方をめぐつて、その作者の生育環境や経験との関わりにおいて述べてきたのだが、ここで、他の批評家の見方について論じておくことにする。まず、浅見淵は「初期作品について」〔網野菊全集第三卷〕・昭和

四十四年五月三十日・講談社）において、次のように述べている。

その独特な深い暖かいものが、作者の実生活で経験した現実の冷たさと言ったものと混じり合つて、時にそれは決して感傷ではない、細かい味を潜めた切ない哀愁を漂わしている。

つまり、暖かいものといひ、哀愁といひ、流れの淀のように、薄っぺらではない深いものを潜めているのである。

つまり、この「哀愁」こそ、先に言った「生の哀しさ」と通じるものである。こういふ、心の奥底に「深いもの」を「潜めている」からこそ、「さくらの花」のよし子のように、死期が迫りつつ、花に見入るゆう子に、生の哀しさを受け止められたと言えらるのだ。

また、よし子が、涙を流さなかつた背景に、作者の不幸な生い立ちを挙げたのであるが、このことに関して、例えば、山本健吉が、前出書の「解説」において、次のように述べている。

その暗い世界は、氏のじつと環境に堪え忍ぶ強い意志や、黙々として人間の真実の姿を見据える観察力を育てるとともに、感情教育の場ともなつた。

つまり、網野の境遇が、その抑制的とも言える感受性を彼女に与えたのであり、それは、涙を流すという、感情の放出ではなく、

「観察」という姿勢を育てたと言うのである。もちろん、こうした強い性格については、「信州人らしい心の強い性根」（山本健吉『平林たい子・佐多稲子・網野菊・壺井栄集』作品解説・昭和三十年二月五日・筑摩書房）というものや、その「圧しきつた客観的態度」が、「高等教育、大学教育を身につけ、英文学やロシヤ文学などから得た教養」（山本健吉・前出書）によるなどという意見もある。そういう、先天的・後天的な理由はもちろんあるだろうが、筆者は、網野の度重なる周囲の不幸こそが、彼女の心の奥深くに、抑制的な感受性を植え付けたものと考えたい。

ここに、もう一つの論文を検討してみたい。三ツ木照夫「網野菊ノート」（『解釈』昭和四十六年八月号）には、江藤淳の「6月の文学・下」（『毎日新聞』五月二十七日夕刊）における、次の言葉を引用している。

十年ほど前の短編集「さくらの花」に収められている諸作では、網野氏の作風はまだ「老いの花」とでもいうようなものを感じさせる沈んだ華やぎと、リリシズムとを感じさせた。

ここにある「沈んだ華やぎと、リリシズム」とは「さくらの花」そのもので言うところ、例えば、よし子とゆう子が、伊豆から贈られてきたさくらの花を二人で眺め、ゆう子の哀れな生をよし子が感じ取る所などが挙げられるであろう。あるいは、作品全体に、花が散りばめられている所などが、そうだと言える。また、三ツ木

自身、「金の棺」「さくらの花」「二期一会」と並べてみると、それぞれみな網野菊氏の代表作であり、共通したテーマは死である。」と述べている。さらに「氏の方法は死に託して自身の心境を語る方法」と述べ、それぞれの作品が「手向けの花」として書かれたような気がしてならなかった。」としている。そこで、まず、「さくらの花」の死を、「金の棺」「二期一会」のそれと比較検討することで、浮き彫りにしてみたいと思う。

### 第三章 『金の棺』『二期一会』における死

『金の棺』（「世界」昭和二十二年五月）は、けい子が主人公で、義理のおじの高義と従妹のみよ子が結婚するが、けい子と高義は心で結ばれている所があり、みよ子は身体が悪く、子どもが出来ず、夫婦として幸せかどうかからぬままに、高義が自殺する。後を追うように、みよ子も病死するといった展開をする。

ここで、けい子が、二人に対して、どういふ感慨を抱いたかだが、まず、高義の死体を拭きながら「到頭、此の人の肉体にも全然触れることなしに終わった。（中略）最後の今も、綿をへだてては、けい子は彼の死骸の冷たさにさえふれないのであった。」と感じる場面があるが、ここには、けい子の、愛する人を失った者の、どうしようもない無念の思いが凝縮された表現がある。また、題名にもなっているように「金の棺」に入れられようともし、高義自身の死そのものは、哀れなものではないと、けい子は考

えるのであり、高義が自殺することによって、けい子は、今まで自殺を企てた、あるいは企てようとしたにもかかわらず、逆に不運に對して、死をもつて答えを出すことを忌避する気持ちを持つに至るのである。いわば、運命への抵抗といったようなものと言える。

そして、みよ子が、高義の自殺を、うすうすわかっているながら、止めようとしなかったことについては、「敵意とうとましさ」を感じる場面がある。ここには、好きだった高義を死なせてしまったという、けい子の悔いと共に、みよ子に高義との結婚をすすめたけい子の無念さや、女としての対抗意識が窺われる。ただ、最後には、けい子は、二人が亡くなったことで、あの世で「仲の良い夫婦」になったかも知れぬと感じている。ここには、来世での幸福しか望めぬのではないかという、この世で生きて行くことの苦悩を暗示しているように思われる。

次に、「二期一会」（群像、昭和四十一年十月）とは、市川団藏が、四国巡礼の旅が終わり、小豆島から大阪へ向かう船上から入水するという出来事を描いた作品である。作者は、ここで、自分と団藏との類似性を発見している。例えば、母と生き別れとなったことである。「生母の愛の味を知らぬ者は七十になっても八十になっても、心の中にいつもすさまじい風が吹いて居るようなものに違いない。」と表現していて、作者自身も、二度ほど自殺を企てたことと重ね合わされる。団藏の八十四歳の自殺を、作者は、悲しみつつも、肯定的にとらえようとしているのであり、夜の海

への入水を、團藏の死の美学だと捉えている。團藏の死は「幸福と云えるのではないか」と思い、「『安楽死』の一つの形と云つてよからう」と考え、「計画の落ちついた注意深さは驚嘆に値する。」と美化している。そして、「私も死ぬ時はどこか人知れず姿を消すことが出来たらよいが……と思うことがある。」と感じ、静かに一人で死んだ團藏の死を、一つの理想と判断する。最後に、團藏の追悼式で、最後の結願所、大津寺での写真で、無精ひげをはやし、生気がなく、淋しげに写っているのを見て、「私」が涙を流す理由は、孤独な老いに対する淋しさ、もしくは人間の生の淋しさを見抜いたからだだったと思われる。他には、彼の芸に花がなしいと言われたことである。作者自身も、そう言われたことがあつたらしい。

このように見ると、網野は、周囲の愛する人々の死によって、独自の死生観を形成していったと言える。それは、特に死に方をどう判断するか、ということであるとも言える。『さくらの花』では、妹の死を、苦しまないで死んだということで、幸せだったと考える。『一期一会』では、團藏が、一人静かに、周囲に迷惑をかけずに、入水したことを理想的な死だと言っている。また、『金の棺』では、自殺そのものには、無念さをにじませているが、あの世では幸せになるだろうと断じている。この三作品に共通しているのは、死そのものについて、肯定的に捉えようとしているということである。また、その捉え方の特徴は、例えば、『金の棺』で、自殺した高義を、父が金の棺に入れたのに対し、

作者は、けい子を通して、高義の哀れな一生に思いを馳せさせているように、作者独自の死生観と言ったものが存在する。

#### 第四章 『暗夜行路』における死生観との比較

ここで、『一期一会』の團藏の死、『金の棺』の高義の死や、網野の実母への憧憬や、死に対する見方について、『暗夜行路』の時任謙作の死生観、ないしは生き方との共通項を探ってみよう。

まず、團藏による、一人きりの静かな自殺ということと、時任謙作による大山での、永遠とも通じる死そのものは、同じ一人きりでの死の迎え方という点で共通するものはある。もちろん、それらが、海と山という、場所の設定の違いはあるが、網野が團藏の死にみた、そして、志賀が謙作にみようとしたり一つの理想的な死に方を表したものだと言えよう。

次に、『金の棺』にある、高義の自殺を受けて、けい子が、逆に運命に抵抗して、生きようとするエネルギーを発散させる姿勢というものは、『暗夜行路』において、時任謙作が、祖父と母との不義の子だという運命に、「俺が先祖だ」という、強い意志で乗り切ろうとする点と、共通する部分がある。

さらには、『一期一会』において、團藏に対して、実母の愛への憧憬を、けい子が感じる場面があるが、それは、『暗夜行路』のみならず、志賀文学全体の中で、たびたび現れる、志賀の母への追慕と共通すると言える。ただ、網野菊の母への憧憬は、広津



桃子が言うように、実母への絶望感による、理想的母親への憧憬に近いものであり（『右路の花―網野菊さんと私』平成六年十一月十日・講談社文芸文庫）、そこに屈折した感情が介在している点は、志賀のものとは異質である。

最後に、『さくらの花』における死の見つめ方という点では、謙作の場合で言えば、例えば、大山で、竹さんの妻が不貞によって、その情夫の刃傷沙汰に遭遇するところで、謙作が、竹さんと比較して、自分が、より安全な場にいるということを冷静に見つめ直すのであるが、こういう、他と比較するという、冷静な観察眼は、両作品に共通して見られる特徴とも言える。

### 終わりに

網野菊自身が、どのような死を迎えたか、については興味のあるところだが、広津桃子の作品（前出書）に詳しい。それによると、直接の死因は不明だが、腎臓の疾患によるところのものであったらしい。その末期の状態の折、網野の甥が、水差しで、彼女の求めに応じて、水を含ませるのを見て、次のように書いている。

成長した甥が側に立って、水を呑まし、タオルで口をぬぐってくれらることに、網野さんはいま幸せを味わっているかもしれない、よかつたなと、思った時、私は眼頭が熱くなつた。

ここにおいて、広津が意識したか否かは定かでないが、『さくらの花』で、姉妹が桜を眺めるシーンが重なる。つまり、網野が描いた、死の間際における生の哀れさへの慈しみというものを、まさに、彼女自身が得られたと見てよい。

### 注

(1) この時のことは、網野が志賀直哉との思い出を綴った『震災の時』（『雪晴れ』（皆美社・昭和四十八年七月二十五日）所収）に詳しい。すなわち、志賀の家がうまく見つかかり、たまたま門が開いており、そこを入ると女中に発見され、続いて夫人に招き入れられ、志賀にめでたく対面となった、とある。

(2) 最近、五木寛之は、『氣の発見』（平成十六年五月二十五日・平凡社）の中で、「泣くという行為によって、自分の中の澱が浄化されたと考える」と述べ、泣くことの効用を挙げているが、『さくらの花』のよし子で言えば、ゆう子との生前における確執が、五木の言う「澱」に当たるものかと思われるのであり、最後に涙を流したことに、より、「浄化された」と考えることが出来よう。

(ささき・せいじ 大阪学院大学高等学校教諭)